

# 「推察」と「表情」の脱意味論と世界像 —「疑問文のシャドーリーゾニング効果」と英語フィールドに於ける「文字範疇を超えた意味形成と意思疎通」への展望

久 部 和 彦

## はじめに

文字言語のみのやり取りではなく「像」を含めたコミュニケーションの交換が主流となる中、「推察」や「表情」の解釈の幅や意味の隙間への感度に「堆積された背景知」を織り込んだ理解や「繊細な重層性」が求められるようになって久しい。「笑顔」という二文字の文字記述ではなく、100種類の「多様な顔文字笑顔やスタンプ」が、「笑顔」という二文字への縮刷表現を解体し脱構築するのである。隙間への着目、分数単位の多様性への敏感さ、解釈の幅の伸縮度合、疑問文が含有するシャドーリーゾニング（影の推論・推察力）の広がり（ゾーン）や効力（フォース）なども、文字言語のみのやり取りの時代からは大きく変貌を遂げた感がある。一方、言語指導の現場では、この脱構築や越境マインドに迫りつせず、「圧縮」と「合理性」の意味理解を繰り返して与えている感が否めない。言語の教育には、言語生活の意識変化や、母語の日常言語使用の特徴を省みる「展望力」の充実こそが不可欠である。本稿では、こうしたことについて、今日、文字言語のみの時代における「推察」や「表情分析（程度・分類）」への教育現場での理解が未だ平板で変革を迫られていることを指摘している。区分力が以前とは比較できないほど多層化し、「像」の組み込みを経た「概念の詳細な区分や深化」あるいは「組み合わせ力」や「間接的な黙示の増加」などへの洞察力和解説力が追い付いていない。「背景知」だけでなく、多様な絵文字やスタンプ等に見られるような「表情分類の繊細さ」、文字言語との併用による「像の拡張解釈や伸縮性の尊重」などが、ユニークさと併存して捕捉されなければ満足度が上がらないのである。今、世の中には、「繊細で多層的な意味」と「解釈の微妙さ」に慣れた人々が増えている。コミュニケーションの満足度のウイングが、大きく変動していること、また、疑問文だけでなく、記述されるあらゆる形態の問いかけについても、切り離されていた「隙間や狭間」が見直されていること等を重点的に指摘し、その背景や捉え方について論じたい。

## 1. 文字言語時代の意識の脱構築と「微妙さの着地の美学」

論調のコアは、（1）文字言語オンリーの時代には、圧縮された「縮刷理解や合理性」や「カタチ（文法など）」と意味のリンク意識がかなり形式的に優先されてきたこと、（2）それへの不満と反動の行き場が、「像や絵文字の組み合わせ提示」が可能になった言語表現ツールの深化により解消したこと、そして、（3）これまで隙間や波間にこぼれていた意味情報の繊細さや編み込み力の復興を通して、ツール側からの後押しにより、言語情報力の「基底に対する美学」が「脱構築されたこと」という3つの見方から構成されている。これは、言語による意思疎通ゲームが「脱構築」されたことを「示す」。例えば、顔文字の膨大な種類と微妙さへのこだわりによる「表情の重視」への意識化である。何よりも「黙示力」というのは伸縮性を有し解釈の柔らかさを担保しうる点にこそ特性がある。像の効果的な提示や選択肢が増えたことにより、「人に推察させ考えさせる部分」の陰影も多層化した。敢えて「文字化しない配慮」等も、顕著な現象であると思われる。何よりも、理解の下地（下書き）の「立体化」が顕著であり、また、「間接性の配慮」などが、像（絵やスタンプ）の編み込みにより実現できている。そして、「微妙な意味のフロート（漂い）の利用」など、やわらかいクッションが多い。こうした傾向の中で、疑問文は、「推察力を掴むための試し投げ」に利用されることが増えた感がある。文字言語プラス黙示像の「組み合わせ」のコミュニケーションに「慣れた」集団社会では、黙示、解釈の幅、隙間の微細な拾い、意味の非固定化、微妙さのフロートを放置する意識等、木目細かい意味土台を好む。「疑問文」は期待されるカタチへのブリッジでもある。J.L.オースティンの「発語内行為」が満載された返答が要求される場面は確実に増加している。発語内行為を重視した疑問文の指導を丁寧にしていたとしても、文字言語オンリーの時代には、無駄が少ないロジカルな応答を疑問文に対して行うパターンを教えていたのではないかと、勿論、これまでも、例えば、Isn't it so hot today? というような英文の受け取り方などは難しい問題が多かった。日本語でも、「そんなに暑くないんじゃない？」と言われた場合に、「そんなに暑くないね」とオウム返しに同調されることを期待して投げかけるのではなく、「ああ、涼しすぎかな、温度上げておくれ」という発語内行為によくあるような返答を求めていることも多くある。「表情」や「像」の木目細かさに慣れている話者達には、経過の中での「像や絵のやり取り（交換）を踏まえた返答力」が模範的とされる。即ち、模範的な返答は、「微妙な温度が出来ればいい感じだね、丁度いい温度、当たるかなあ、（笑）、、、」等のよりきめの細かい微妙さを含む返答が標準値とされるのである。こうした層には、より微妙で中庸、かつ、言い切りでなく対流感を演出する「曖昧表現」や「同感力」を付した物言いが返答のマナーになるのであろう。

## 2. 意味理解のケーススタディ探究(展望)の重要性の喚起

以下のように教育内容意識をデザインしてみてもどうか。まずは、「この場合はこう答える」というパターン化した教え方を否定し、その真逆を行く指導、つまり、通例ではなく、ユニークな例を予断なく出し、疑問文が内包する発語内行為の推察力やニュアンスの「接近度」を洗い出すような解釈演習を勧めたい。そこでは、どの位の「ぼかし方」が適切かなど、個々のケースに即したニュアンスの検討を「惜しまず考えあう時間」が必要である。この転回力で「翻訳力」は上昇する。また、「表情」の細分化研究から逃げないことも重要である。「表情の理解」とは「文字言語化(加工した理解)」がされていない「経験値(堆積知)」から弾き出される「集合力」を通した理解である。文字言語的な意味の確定的なことが言えないとしても「捨てて」しまつては元も子もないのである。「可能性」のいくつかの「値」を「推理」をするためには、「表情」の解釈力はマイナスにはならない。躊躇わずに一つ一つのケースごとに異なるという前提で形容詞の本目細かい研究が有効であろう。語彙や構文については、論理的な構文透視力や構文操作力の認識形成を交えておこなうことが有効である。具体的には、And, Or, If~, then, Not,などを「接続詞」としてではなく「論理的演算子(ロジカルオペレーター)」として教え、このような語が分に入っていれば、その分は真偽判定可能な文であり、そのような文を特に「命題」として区分する指導を反復することからなどから始めればよい。「マスターム(量子子)」である some, several, all などの論理的な課題や、頻度副詞 sometimes, often についても第一階述語論理の操作として演習させることが重要である。結局のところ、少ないサンプルの数値統計を介した合理化の英語教育論によらず、ヴィトゲンシュタインの説くような「展望(Ubersehen)する」という「堆積知を積み上げるような手法」によらなければ、「黙示」や「曖昧さ」というフロート・ゾーンを意識化できないように思われる。黙示はこの指導ゲームの「中でも」起こる。「解釈の交錯や流動性」を知ること、そうした観点を含んだ意味のカバリングを弾き出す結節力が育つのではあるまいか。「可能世界想定力(サイコロの組み合わせの構想力のようなある種の結節点の獲得力)」が育てば、意味理解も本目の細かいものになる。像の役割が増えた意味形成の世界像が、文字言語のみだった概念形成よりは、より豊かな言語力であることは「所与」の事実であろう。実在を探り当て透視する「目(解釈力)」を育成する言語教育には像や表情を厄介な不確定的要素として捉えず、「表情研究と翻訳力」を躊躇わずに「堆積」させる方向が正しい道であると考えたい。

## 3. 「像を文字言語化しないこと」の重要性

「推察」や、「表情」による語りかけには、文字的な言語では達成されない部分が含まれている。人々は「生の表情」のスライドや「シンボリックな黙示効果」として絵文字やスタンプを文字交換に「組み合わせ」、埋没しがちな「隙間」を語り、縮刷を開放する側へ揺戻し、意味圏の波間のウイングを復興しているのではないのか。また、それらの活用は、文字範疇を超えた意味の全体性への写像として添えられてもいるのであろう。意思疎通が、文字伝達ツールを「介して」行われる市場がけいせいされたため、真意や本意といった深層に含意されたトータル・ピクチャーへの導き手が要るのである。黙示像の添付は「縮刷された文字言語情報の隙間」を埋めるため、「干潟(微生物が生き残る場)」として、「意味の補助者」として、その地位はすでに不動の位置を得たように見える。多くの黙示像はユーザーに「隙間の補強」として意識されて久しい。曖昧さからの脱却への歩みも、そのまた逆も、黙示像には「盛り込まれうる場(トポス)」がある。ここでいうトポスとは、文学的枕詞のトポスやライトモティーフではなく、ギリシャ哲学での元来の「場」を表す意味での「トポス」であるが、当然ながら「単なる空間的な場所」ではなく、アリストテレス的な「修辞論上の場所」のことである。このトポスの意味形成力というのは、束的・輪郭的な伸縮可能構造のゾーンに潜む「漂い」の魅力である。こうしたことが意識されつつ、それが利用価値として深く認識されてもいる言語情報空間の存在は、「文字範疇限定の意味伝達システムの脱構築」であり、ある種の「意味圏の深化」でもある。「展望の手法が含むこと」といえば、特徴的な言語ゲームを拾いながら「傾向性」という「ゆるやかな束」に気付き、圧縮され縮刷化済の多くの「詰まった表現」を解きほぐし、隙間や狭間を拾い、「(即断しない)堆積の効いた知」による「目」をとおして「今一度見廻す」ことが重視されていることはよく知られているとおりである。文字言語中心の時代には、合理的な縮刷性や暗示や黙示を避けることが好まれたこともあった。今では、多くの言語話者の中で、文字言語の真意や意味の成熟した理解は、「像の助力」の中でより高度化しているように思われる。像が加わり、表情や文字言語でのみで考える推察とは別の「曖昧さ(解釈の余地)」を残す意外性への気付きも生まれる。このあたりから、魅力的な「像」と「文字」の掛け合いの接点が意識化され、「融合や越境の産物の豊饒さ」が見え始めるのではなかろうか。

### 主要参考文献：

Passmore, J. *Recent Philosophers* Gerald Duckworth & Company Ltd.1985

Wittgenstein, L. *Philosophical Investigations* Oxford: Basil Blackwell 1953、他